論文

「省略する言語文化」と「明示する言語文化」

―暗黙知、明示知、「見える化」についての考察―

林　伸一

1. はじめに

国立国語研究所の野田尚史氏は、2013 年日本言語学会の第 147 回大会において、公開シンポジウムのパネラーとして「世界の言語研究に貢献できる日本語文法研究とその可能性」について、次の４点について主張している。（予稿集より、番号は筆者）

（１）日本語学でこれまで盛んに研究されてきた研究で、世界の言語研究に大きな貢献ができると考えられるのは、南不二男の「文の階層構造」の研究や、三上章の「主題」の研究である。

（２）日本語学でこれから大きな発展が見込まれる研究で、世界の言語研究に大きな貢献ができると考えられるのは、益岡隆志らの「叙述類型論」や、沼田善子らの「とりたて」の研究である。

（３）日本語と英語などとの対照によって提唱された「する」言語と「なる」言語という対立は再検討されるべきであり、それによって新たな研究の発展が期待できる。

（４）日本語と英語などとの対照によって提唱された高コンテクスト言語と低コンテクスト言語という対立は再検討されるべきであり、それによって新たな研究の発展が期待できる。

（注 1）

シンポジウムでは、以上 4 点の内容について野田氏より具体的な説明があった。

野田氏の発題は、現在の言語学界や教育学界が細かい内容の研究に深入りしてしまい、巨視的なレベルでの研究がなおざりにされてきた点や、「する」言語と「なる」言語や高コンテクスト言語と低コンテクスト言語といった二項対立的な観点をステレオタイプの発想として排除してきた学界の狭量さをするどく突いている。

また、野田氏の問題提起は、流行を追いかけるごとく新しいテーマを追いかけるあまり、本筋を見失いかけている学界の閉塞感を三上章の「主題」の研究や沼田善子らの「とりたて」の研究が打破する可能性を指摘している。特に三上章の「主題」「略題」「無主格文」の研究の蓄積は、世界の言語研究に大きな貢献をする可能性があるのだから再評価されてしかるべきである。

本稿では、野田氏の発題を受ける形で、特に上記第 4 点目の「高コンテクスト言語」と「低コンテクスト言語」という対立に焦点化し、再検討したい。野田氏の言語学的な観点からの発題に文化論的な視点を加え、「省略する言語文化」と「明示する言語文化」という鍵概念（key concept）を設定して、検討していく。

2. 先行研究

林(2007)は、日本事情論として「場の倫理」と「個の倫理」という鍵概念をたてて日本文化の実情を論じている。その鍵概念は、河合（1995）を援用したものである。

さらに、林(2008)は、「和」の文化と「差」の文化という切り口で、年末の十大ニュースなどランキングを好む「差」の文化の実態を日本事情論として考察している。

日本の伝統的な価値として「和」を大事にする文化が守られてきたが、近年の欧米的な価値として「差」を重視する文化が目立ってきており、換言すれば「調和の文化」と「差異の文化」ということになる。それは、林(2007)の指摘した「場の倫理」と「個の倫理」と重なり合う面もあり、ホール（Edward T. Hall 1979）のいう「高コンテクスト文化」と「低コンテクスト文化」の対立とも関係する。

また、林（2014）は主に異文化コミュニケーション論と日本人論を含む日本事情研究の観点から、「省略する文化」と「明示する文化」という概念を設定して、現実の諸問題を整理しようと試みているが、本稿ではそれを補足しながら、再考したい。

3. 研究方法

いわゆる日本人論や日本文化論に多く見られる二項対立的視点や文化本質論的視点に対しては、1980 年代より杉本・マオア(1982)らの批判や、問題点を指摘する研究が多数出現している。そのような批判や問題点の指摘は的を射た点も多いが、日本人論や日本文化論を論じること自体をタブー視するような傾向が支配的な現状は、比較文化学や異文化研究の発展にブレーキをかけるものであると思われる。本稿では、現状の日本事情を明らかにする目的で、あえて「省略する言語文化」と「明示する言語文化」という二項対立的な観点から立論して、それを超える視点を模索したい。

論理的思考は、必ずしも頭から二項対立的思考を排除するものではない。

Ａの言語文化とＢの言語文化の間に、何らかの差異があることを前提に、その差異を研究するのが、異文化研究であり、その文化差をいかに認識し、教育していくかを問題にするのが、異文化間教育学会や比較文化学会の役割であろう。そもそも同じ人間同士だから男女差や文化差などないとするユートピア的な考え方は、論外である。

4.「省略する言語文化」と俳句

俳句は、五・七・五のモーラから成る日本語の定型詩であり、「省略する言語文化」の代表例と言っていいだろう。世界最短の定型詩とされ、モーラ（mola）という音声学の概念がなかったため、十七文字（じゅうしちもじ)、十七音（じゅうしちおん)、十七語（じゅうしちご）とも呼ばれていた。ただし、「じゅうしちもじ」の場合、文字数は 7 文字であるが、6 モーラとなり、文字数とモーラ数は必ずしも一致しない。「十七語」というのも「十七」を 1 語、「語」を 1 語と数えれば 2 語であるが、モーラ数は 5 となり、語数とモーラ数も一致するとは限らない。

俳句を詠む俳人としては、江戸時代の松尾芭蕉(1644-1694)、与謝蕪村(1716-1784)、小林一茶(1763-1827)や明治時代の正岡子規(1867-1902)がよく知られている。

俳句は近世に発展した文芸である俳諧連歌、略して俳諧から生まれた近代文芸とされる。室町時代に流行した連歌の遊戯性､庶民性を高めた文芸が俳諧であったが 17 世紀に松尾芭蕉が出てそ

の芸術性を高め、なかでも単独でも鑑賞に堪える自立性の高い発句(ほっく)を数多く詠んだ事が後世の俳句(はいく)の語源となったとされる。

そもそも短歌（和歌）から派生した連歌・連句の最初の五七五を発句と言うようになった。連歌・連句の最後の七七は、挙句(あげく)と言われ、「挙句の果て」のように慣用句として「最後の最後には」の意で現代でもなお用いられている。発句の五七五の部分が独立し、季題を詠む短詩形として単独で作られるようになり、近代になって俳句となった。俳句が俳諧から分離独立した過程で、省略の言語文化のメカニズムが働いたことになる。

さらに近代文芸として個人の創作性を重視して俳句を成立させたのが明治時代の正岡子規であった。子規は江戸末期の俳諧を月並俳諧と批判して近代化した文芸たらしめるための文学運動を行い、子規によって発句が俳句として自立したとも言われる。子規の別名が「ホトトギス」であることから、子規にちなんで『ほとゝぎす』という雑誌が 1897 年に創刊された。途中ひらがなの誌名が『ホトゝギス』に変わり、さらに表記が『ホトトギス』へ変わったりはしたが、2013 年 8 月には、通巻 1400 号に至っている。116 年に渡る同誌の刊行は、根強い俳句への支持の象徴であり、証である。

NHK の『ラジオ深夜便』(2011 年 2 月号)のテキストには、「鷹羽狩行の季語で日本語を旅する」が連載されていて 2 月の俳句として与謝蕪村の次の句が紹介されている。

「鶯の枝ふみはづす初音かな」

それには鷹羽狩行の季語の解説と解釈が添えられている。

「普通『鶯』といえば声のことです。『初音』だけで季語になっていますが、一句の調べを整える上で『鶯の初音』としてもかまいません。初音がとぎれたのは、力み過ぎて枝を踏み外したためだと見たところがほほえましい」。

「初音」だけで季語になっているというあたりが、「省略する言語文化」の証左と言えるだろう。ありのままの場景を詠んだ写生句とも思えるが、「初音がとぎれたのは、力み過ぎて枝を踏み外したため」という因果関係を推測させたり、「ほほえましい」という感想を言外に含ませたりするあたりも「省略する言語文化」の味わいと言える。

松尾芭蕉や正岡子規の俳句も、NHK の『ラジオ深夜便』(2011 年 5 月号)のテキストに「五月誕生日の花ときょうの一句」として紹介されている。

ちなみに子規の俳句は「地に落ちし葵踏み行く祭哉」(5 月 15 日、季語：葵祭)

同コーナーには、山口県防府出身の種田山頭火(1882-1940)の俳句も紹介されている。

「ふるさとはみかんのはなのにほふとき」(山頭火、5 月 22 日、季語：蜜柑の花)

このように、江戸時代からの俳人が今なお雑誌や新聞などで取り上げられて、人々にその俳句が語り継がれ、愛されている。

5.「Haiku」の広がり

また、英語などの非日本語による 3 行詩も「Haiku」と称される。日本語以外の俳句では五・七・五の音節（シラブル：syllable）の制約がなく、季語もない場合がある。

現在では外国人が日本語で俳句を作ることも始まり、外国人の俳人には現在マブソン青眼（注 2)、アーサー・ビナード(Arthur Binard)などがいる。

マブソン青眼は、高浜虚子の「鎌倉を驚かしたる余寒あり」の句を例にして「余寒」という春の季語をフランス語で説明している。ちなみに「余寒」とは立春後の寒さのことで、寒さが明けてもなお残る寒さの意で、残寒とも言う。

Les derniers froids (yokan)

Il s'agit des quelques intempéries survenant après la fin du froid.

- Kamakura wo Odorokashitaru Yokan ari
- A Kamakura,
  Le grand Bouddha semble avoir
  Peur des derniers froids ! Kyoshi TAKAHAMA

上記の虚子のフランス語訳は、一行目が 5 音節、二行目が 7 音節、三行目が 5 音節となり、3 行 17 音節で構成されている。日本語の原文には表れていない「Le grand Bouddha」(大仏)が入っていて、「鎌倉の大仏(さえも)驚かす」ことになっている。日本人にとっては、「鎌倉」と言えば「大仏」との連想が働くため「大仏」を省略してもかまわないが、外国人にとってはそうはいかない「日本事情」の部分がある。

俳句は、日本国外においても広く受容され創作もされている。英語圏の国々において盛んに詠まれているだけでなく、スウェーデン、ドイツ、フランス、ベルギー、オランダ、クロアチア、スロベニア、セルビア、ブルガリア、ルーマニア、アルバニア、ロシア、中国、ペルー、メキシコ、アルゼンチン、ウルグアイ、コロンビア、ブラジル、インド、バングラデシュなどでも句作が行われている。台湾、ブラジルには日本語で俳句を詠む人々が創作活動を行っている。
(wikipedia「俳句」参照)

英語俳句 (Haiku in English) は 3 行 17 音節で構成されるのが典型的であるが、中には 1、2、4 行 (またはそれ以上) のもの、16 音節以下のものもあり、定型規則は厳しくない。英語俳句においても季語 (season word) 、切れ (cut) を入れるのが通則とされている。地域によっては四季が存在しなかったり、気候風土の違いから、季語には日本にはない文物・習慣も多く採用されたり、「季節感を盛り込む」という程度で季語の規定がない場合もある。(wikipedia「俳句」参照)

松尾芭蕉の「古池や蛙飛こむ水のおと」を例にとると英語訳は次のようになる。

An old quiet pond...
A frog jumps into the pond,
Splash! Silence again.

(Harry Behn 訳、 wikisource:Frog Poem 参照)

上記の英訳も一行目が 5 音節、二行目が 7 音節、三行目が 5 音節となり、3 行 17 音節で構成されている。日本語の原文では「水のおと」とだけ詠まれ、それがどのような音なのかは示されて

おらず、読者の想像に任されている。しかし、英訳の中には「Splash!」という語で訳出してあり、「バシャッ、パシャッ、ザバッ、ザブン、ザブザブ、ピチャピチャ、パチャパチャ、ドーッ」などという擬音語を連想させ、軽い音から激しい音まで幅がある。擬音語・擬態語が発達していると言われる日本語であるが、あえて擬音語で表現することを省略し、読者の想像に任されているあたりが、俳句の奥深さと言えるであろう。

中国語による俳句は漢俳（中国語版）と呼ばれる。漢俳は五字・七字・五字の三行十七字で構成するのが一般的と言われる。漢俳には格律体と自由体とがあり、格律体は文言（文語文）を用い平仄（ひょうそく：四声：平、上、去、入）、押韻のきまりがある。自由体には平仄・押韻はなく白話文を用いてもよいとされる。

芭蕉の「古池や蛙飛こむ水のおと」の中国語訳は次のようになる。

閑寂古池旁，青蛙跳入水中央，撲通一聲響。

日本語以外の言語による俳句においては、17 音節では言葉数が多くなってしまうという意見もあり、俳句としての簡潔さを追求するためにより少ない音節での句作を試みる動きもある。

日本の詩歌の伝統をひきついで成立した俳句は、五・七・五の音数(モーラ)による言葉の調べ（韻律）と「季語」と「切れ」によって短い詩でありながら心のなかの場景（心象風景）を大きくひろげることができるという特徴を持っている。その場の風景をそのまま写真に撮ったような俳句の技法もあり、「写生俳句」と呼ばれている。「客観写生」か「主観写生」かなど諸説がある。

正岡子規は、事実をありのままに写すという俳句の技法を散文に適用した「写生文」という文芸用語を提唱した。俳人の高浜虚子や歌人の伊藤左千夫や長塚節、夏目漱石らにも影響を与えたと言われる。

6.「省略する言語文化」から「明示する言語文化へ」

近年、「見える化」という言い方がビジネス界を中心にキーワードになりつつある。「見える化」は、広義には「可視化」と同義であるが、狭義には可視化されづらい作業のプロセスを細かく明示することにより、手順を明確化し、作業効率を高めることを目指す手法として用いられている。ビジネス界では経営者が主導的に使っているように見受けられる。ビジネス界だけでなく、教育、医療、製造業の現場などでも、広く使われるようになってきたが、いまだ学術的な用語として確立した言葉というわけではない。

「見える化」は、もともと企業活動の漠然とした部分を数値などの客観的に判断できる指標で把握するための可視化に対して用いられた。別名「測れる化」とも言う。ただし、今日では広義の「可視化」全般に対して使われるようになってきている。

製造業の現場などでは、団塊の世代の技術者が大量に定年退職を迎え、それまで職人的に伝えられてきた暗示的知識を明示的に開示する必要に迫られ、職場での作業工程の「見える化」の必要性が叫ばれるようになってきた。また、海外への公的な技術移転、企業の海外工場移転などに伴い、日本人同士では先輩から後輩へ「見よう見まね」「阿吽の呼吸」で伝わった細かい技術の伝承が、プロセスの明細を明文化する作業に迫られていることも「見える化」を促進せざるを得

ない背景にあると言える。

「見える化」の推進により、作業についての情報を組織内で共有させることができ、現場の問題などの早期発見・効率化・改善に役立てることができる点もメリットである。一方、プロセスの明細を明文化することにより、これまで企業秘密とされてきた情報が、容易に外部に流失してしまうというデメリットもある。つまり、何年もかけて試行錯誤の上、蓄積されてきた手続き的知識や体験的知識が、電子媒体を介して、一瞬にして外部へ洩れて行ってしまうという恐れもある。

業種や分野などにより「見える化」の適用方法は異なるが、一般的には問題・課題の認識に利用される。図・表・グラフにして可視化する場合もあれば、音・光による体感認識を用いた「見える化」の例もある。（wikipedia「見える化」参照）

問題の解決策を講じるために、問題点の把握を目的として「見える化」を行うこともできる。IT インフラの整備により、電子データ化された各種業務内容を有効活用するために、蓄積されたデータの抽出・加工によって「見える化」を行う場合がある。

医療の現場でも、がん診療において、医療情報・患者情報などを共有化して、がん診療の質的向上を図る場合にも、「がん診療の質の見える化」というような表現が使われている。心筋梗塞の患者が、カテーテル手術の前に造影剤を打って血管の様子を画像で見ながら医師の説明を受ける場合も、医療の「見える化」である。手術後に転院する際、カルテだけではなく手術の CD 画像を持たされる場合も、異なる医療現場の「見える化」による連携の例である。これは、ビジネス界において使われた「見える化」が、広義の「可視化」全般に拡大して用いられるようになった例と言える。

7.「見える化」と「和」の文化

明確な目的意識を持たずに、ただ「近頃流行っているから」「何となく効果がありそうだから」というだけで「見える化」を行っても、現場に負担を強いてエネルギーを消費するだけで、成果が上がらない場合がある。明示的な目的を持ったうえで「その目的のためにどの作業工程の何を見える化し、その結果からどのような対策を打つか」までを考えてから行うことが望ましいとされる。（wikipedia「見える化」参照）

また、業務の今まで把握されていなかった知られざる部分を「見える化」によって把握し、改善を講じるということは、「今までの業務のやり方は駄目だった」と批判したり、否定したりすることになる場合がある。つまり「見える化」を実施する際には事前の関係者間による調整が十分でないと、円滑に改善できなくなる恐れがあるため、職場内のコミュニケーションと「和」の文化を尊重する必要がある。

現場のマインドなど自己申告による主観的な値を数値化しても、目標を意識したバイアスがかかってしまい客観的な判断材料にはならない場合がある。

8.「可視化」とプレゼンテーション

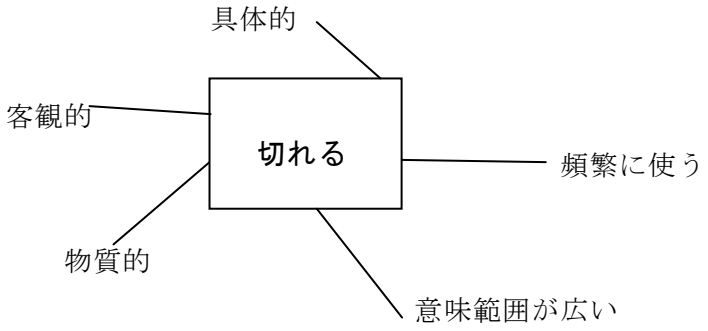
「見える化」とは可視化のことであるが、そもそも可視化とは、人間が直接「見る」ことのできない現象・事象・関係性を「見る」ことのできる画像・グラフ・図・表などにすることをいう。「視覚化」「可視化情報化」「視覚情報化」ということもある。英語の ″visualization″, ″visualize″ に相当し、そのまま日本語の文脈でも、ビジュアリゼーションとかビジュアライゼーションとカタカナで用いられることもある。

作業工程の流れの可視化として「流れ図」や「流れ作業図」や「工程図」などフローチャート（flowchart)を作成することも可視化「見える化」の具体例である。フローチャートは、そのまま日本語中でも外来語として用いられるが、あえて説明的に漢字表記すると「生産工程順序一覧表」となる。カタカナ表記のフローチャートは、初見では意味に不透明であるが、漢字表記の「流れ図」「流れ作業図」「工程図」「生産工程順序一覧表」とすると、たとえ初見であっても意味には透明である。漢字文化圏の人々にとっては、表記をカタカナから漢字にするだけでも意味内容の可視化「見える化」につながる。

可視化手法には、ベクトル表示・グラフ表示などの基本的な表示法やパワーポイントなどを用いたプレゼンテーションの方法などがある。パワーポイントは、当初、学会や新製品の紹介などに用いられていたが、近年では、教育現場での授業や学生の「調べ学習」の発表などに広く用いられるようになってきた。天井にプロジェクターを取り付けた教室や会議室が整備されたり、軽量で持ち運びに便利で高性能の薄型プロジェクターが開発されたりして、ますますパワーポイントを用いての「見える化」プレゼンテーションが増えてきている。パワーポイントの画面表示もキーワードの文字情報だけでなく、ベクトル表示・グラフ表示など図表や写真・イラスト・マッピングなど絵画的記憶に残りやすい工夫がなされている。知識には、分析的に規則を説明できるような明示的知識と説明はできないが感覚的､直感的にわかるような暗示的知識があるとされる。(ヒューマンアカデミー2009 参照）パワーポイントは、「パワポ」や ppt と省略されることがある。

言語の研究においても、意味範囲をマッピングすることにより、「見える化」を実現できる。

李(2010)は、一般的な「切れる」と若者語の「キレる」の区別を図１のようにマッピングしている。そもそもの研究の当初の着想レベルの違いをちょっとメモしておく程度にマッピングしておくというやり方もある。図１のような図をパワーポイントで示し、「見える化」のプレゼンテーションをすることも増えてきている。



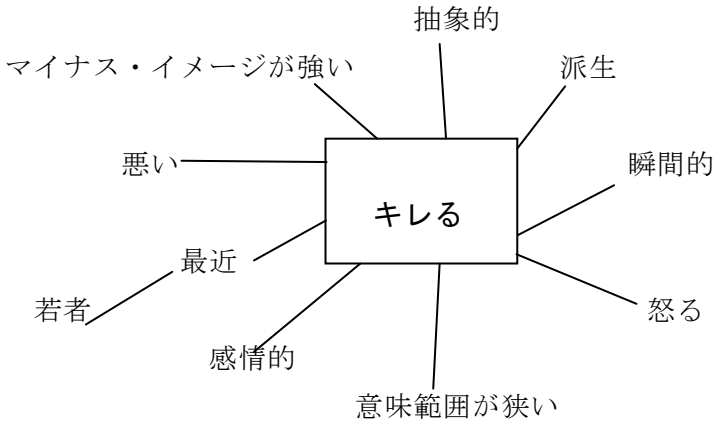


図１　「切れる」と「キレる」の区別

上記の図１では、「切れる」と「キレる」の関係がよくわからない面もあったが、次の改訂版の図２では、両者の重なり合う部分も示され、より詳細で分かりやすくなっている。

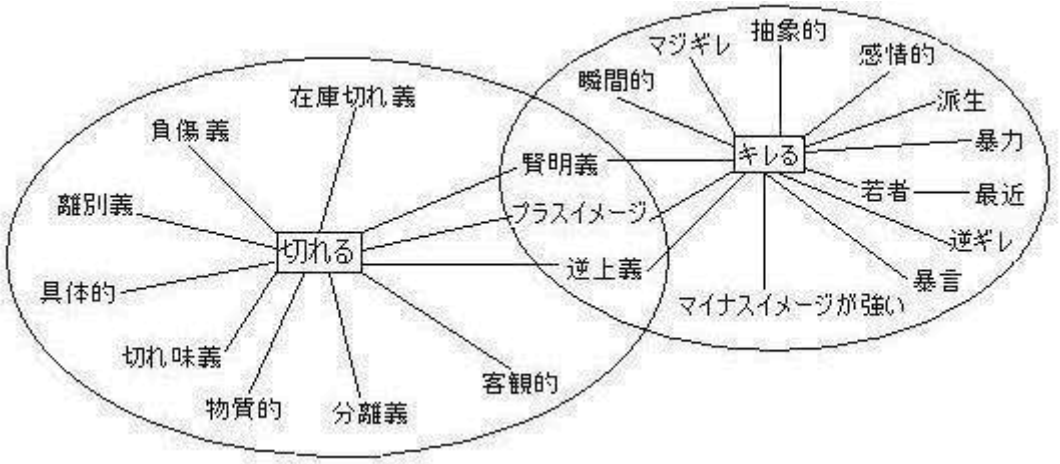


図２　「切れる」と「キレる」の関係図

明示的知識は、一般に教室や教科書で意識的に獲得されるもので、日本語の助詞の「は」と「が」が主題と主格の別を示すというような母語に関する知識のほとんどは母語話者にとって暗示的知識とされる。暗示的知識は、暗黙知とも言われ、明示的知識は形式知とも言われる。

暗黙知は、認知の過程あるいは言葉に表せる知覚に対して、言葉に表せない・説明しにくい身体の作動や手続きを指す。暗黙知とは「知識というものがあるとすると、その背後には必ず暗黙の次元の『知る』という動作がある」ということを示した概念である。この意味では「暗黙に知ること」（tacit knowledge あるいは tacit knowing）と解釈したほうがよいと言われる。

たとえば自転車に乗る場合、人は一度乗り方を覚えると年月を経ても乗り方を忘れない。自転車を乗りこなすには数々の難しい手続きや順序性、技術、コツなどがある。自転車に乗れるようになっても、その乗り方を人に言葉で説明するのは困難である。つまり人の身体には、明示的に

は意識化されないものの、暗黙のうちに複雑な制御を実行する過程が常に作動しており、自転車の制御を可能にしているのである。水泳に関しても同様のことが言える。一度泳げるようになった人は、何年か泳がずにいても泳ぐことができる。このように自転車に乗ることや水泳は、体験的理解に基づく暗示的知識（暗黙知）であり、「手続き記憶」として「長期記憶」に保存されることになる。

9. 理解の三分野「知的理解」「体験的理解」「共感的理解」

理解の三分野「知的理解」「体験的理解」「共感的理解」の関係を図解すると次の図３のようになる。「理解」という抽象的な事柄を「見える化」する試みである。

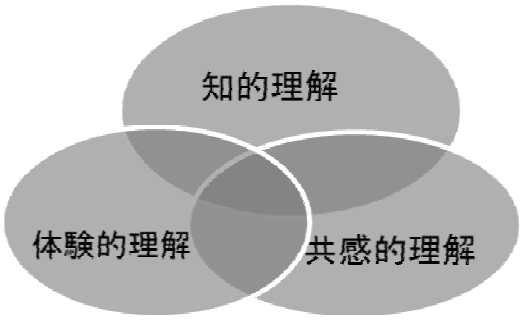


図３　知的理解・体験的理解・共感的理解の関係

学校で教科書や教材を用いて学ぶ場合は「知的理解」で、そのような知識は明示的知識となる。それに対して実習や生活現場で実際に体験して学ぶ場合は「体験的理解」、カウンセリングの場面などで重視される「共感的理解」は暗示的知識となる。「体験的理解」や「共感的理解」を言語化して他者に伝えられれば「知的理解」につながる可能性が出てくる。オリンピック大会などスポーツ中継を担当する解説者は、担当する競技のベテランの体験者であることが多いが、体験したことのない視聴者に自分が体験した難しさや面白さを共感できるように言語化して伝えることが求められる。

可視化「見える化」は、暗示的知識（暗黙知）を明示的知識（形式知）に変換することである。それは、「省略する言語文化」を「明示する言語文化」に変換することでもある。ダンスのレッスンや伝統工芸品を制作する過程などを細かくビデオに撮って解説をつけるような場合は、映像による「見える化」により、暗示的知識（暗黙知）を明示的知識（形式知）に変換する例である。スポーツ競技のコーチは、選手の動きをビデオに撮り、よかった点や改善点を選手に分かるように言語化して明示することが主な役割となる。よく「からだで覚えろ」と言うが、「体験的理解」は体験を通して得られるものであるが、言語化して明示されることにより、さらに一層理解が深まることになる。スポーツ競技に限らず、コーチング（coaching）に関わる者には、暗示的知識（暗黙知）を明示的知識（形式知）に変換する言語表現能力が必要となる。体験者が誰でもコーチになれるわけではない。

吹奏楽団で活動している学生から、次のような「見える化」の例が示された。

「私の所属している部活には、OB 楽団があり、これは社会人や引退した 4 年生で構成されています。そのため、全員が練習に参加するのはスケジュール的に難しく、本番だけやってくるような人もいます。しかし、大会では成績を残します。

楽団員がバラバラに練習し、何度かしか合奏がないのに全員が息をそろえてひとつになれる理由は、ビデオカメラによる「見える化」が大きく関わっています。先生の指揮の様子や合奏の全景を毎回必ず映像として残し、全員が見れるように youtube にアップしています。それを各個人が見て、イメージトレーニングすることで本番にいきなりメンバーがそろっても一緒に演奏できるのです。こんなに近くに『見える化』があったことに、今気づきました」（大学 3 年、女子学生「振り返りシート」より）。

準拠枠（英: frame of reference）など関連する研究はあるが、暗黙知の認知的次元を科学的・実証的に理論化する試みは、未だ発展途上の段階にある。

形式知は知識の分類の一つであり、主に文章化・図表化・数式化などによって説明・表現できる知識を指すのだが、カウンセリングの分野では、コーヒーカップ方式やヘルピング・モデル、マイクロカウンセリングなど個別面接のためのカウンセリングモデルが文章化・図表化する形で提案されている。従来暗黙知とされてきたようなカウンセリングの技法や流れに関する経験知を明示し「見える化」することはカウンセラーの養成にも貢献すると思われる。（注 3）

10.「明示する文化」と「パブリック・ディプロマシー」

国際社会の中で自国の存在感を高め、自国のイメージを向上させ、自国についての理解を深めるために、相手国の政府に対してというより、相手国の国民に働きかけていく外交活動のことを「パブリック・ディプロマシー（public dipromacy)」という。そのために、政策広報としての情報発信、知的交流、文化・芸術交流、人物交流など各種交流事業、国際放送などの活動が複合的に展開されている。(注 4)

渡辺(2011)は、「パブリック・ディプロマシー」に関して「政府が自国の政策を外国に伝達する際に重要なことは、相手国の国民と意見、関心、文化を交換して理解すること」としている。

欧米諸国、特に米国が「明示する言語文化」の代表格のように思われがちであるが、その背景には米国から日本への「パブリック・ディプロマシー」があったことが考えられる。日米間のこれまでの知的交流、文化・芸術交流、人物交流などを含む民間交流が草の根的な交流というよりは、米国が「明示する言語文化」の代表格のように印象付ける意図とストラテジー（strategy）が存在していたし、現在もなお存在している。米国は、自国の誇るべき点ばかりでなく、差別や貧富の格差、失業など恥部に当たる面も包み隠さず「明示する言語文化」を持った民主主義の手本のような国であることを日本だけでなく世界に発信し続けてきた。そうすることによって、世界の政治・経済・文化のリーダーとしての位置を確保したかったのであろう。

しかし、「明示する言語文化」と思われてきた米国と戦後「省略する言語文化」から「明示する言語文化へ」の移行を促進してきた日本との間に外交機密が存在し、日米政府間の密約が存在したことが、近年になって明らかにされてきている。

1960 年 1 月の日米安保条約改定の際に日米政府間で交わされた合意・密約について、2009 年 9

月から 2010 年 3 月にかけて外務省の調査チームと有識者委員会がそれぞれ調査･検証を行っている。外交機密の「見える化」に取り組んでいることになる。

また、ウィキリークス（WikiLeaks）は、2010 年 11 月 29 日より、米国外交機密文書約 25 万点の公開を開始した。内容としては、公式では公開されることのなかった外交公電や世界中の重要施設についての情報などが含まれており、当初は少しずつ文書を新たに公開していくという手法をとっていたが、2011 年 9 月 2 日にすべての文書を未編集のまま全面公開した。（wikipedia「ウィキリークス」参照）

日本政府による対外文化宣伝・輸出政策で使用される用語としてクールジャパン（英称：Cool Japan）があり、パブリック・ディプロマシーの一環であると言える。

クールジャパンとは、日本の文化面でのソフト領域が国際的に評価されている現象や、それらのコンテンツそのものを指している。具体的には、日本における近代文化、ゲーム・漫画・アニメや、J-POP･アイドルなどのポップカルチャーを指す場合が多い。さらに、自動車･オートバイ･電気機器などの日本製品、現代の食文化・ファッション・現代アート・建築などを指す。また、日本の武士道に由来する武道、伝統的な日本料理・茶道・華道・日本舞踊など、日本に関するあらゆる事物が対象となりうる。（wikipedia「クールジャパン」参照）

「和食」がユネスコの無形文化遺産になったことに関連して、冨永(2013)は、「数値では表せないけれど、文化や国柄への敬い、憧れは決して侮れない。『なかなかの国だ』と思わせる魅力は、いずれどこかで当の国民を救う。軍備や経済のように他者を圧することのない、しなやかな安全保障である」と述べている。冨永(2013)の論に従えば、「和食」がディフェンス・ディプロマシー（defence diplomacy 防衛外交）の一端を担うことになる。(注 5)

日本では、経済産業省製造産業局に「クール・ジャパン室」が置かれ、商務情報政策局クリエイティブ産業課が全く別に「クール・ジャパン／クリエイティブ産業政策」を担当し、「クールジャパン戦略担当」大臣（複数の担当と兼任）も置かれるなど経済政策の一環として、クールジャパンが位置付けられており、その一端を担うのが「和食文化」ということになる。

現代の食文化・ファッション・現代アートなども戦略産業分野として見なされ、日本の文化・産業の世界進出促進、国内外への発信などの政策として企画立案され、推進されているためパブリック・ディプロマシーの一環として位置づけられる。コンテンツ産業や伝統文化などを海外に売り込む「クール・ジャパン戦略」として、日本のポップカルチャー方面を中心に文化産業の海外展開支援、輸出の拡大や人材育成、知的財産の保護などを図る官民一体の事業も展開されている。経済産業省主催で日本文化の対外ビジネス展開や市場開拓を検討する「クール・ジャパン官民有識者会議」が民間有識者と関係省庁参加で開催されている。税制面の優遇も検討されており、「コンテンツ特区」を設け、国外からも人材を集める計画が進められている。

2010 年に政府はクールジャパン推進により 2009 年度の海外収入 1 兆 2000 億円を今後倍増させるという数値目標を示した。日本の文化や伝統を産業化し国際展開するため官民挙げて推進方策や発信力強化に取り組む「クールジャパン推進会議」も設置されている。冨永(2013)が、「数値

では表せない」とした文化も海外収入の一部として数値化されて勘定に入れられているのが現実である。

ベルギーのブリュッセルには、BENTO(弁当)と DON(丼)を売る店が出たとのことである。昼の常連は近くの勤め人で、日替わり弁当や丼を持ち帰っていくそうである。冨永(2013)によると、栄養バランスがいい弁当は、各国に広まり、SUSHI のような外来語になりつつあるとのことである。

せっかくの日本文化へのプラスイメージも 2013 年 12 月 13 日(金)に議決された特定秘密保護法が台無しにし、帳消しにしてしまう恐れがある。「明示する言語文化」へと動き出している日本が言論統制の「明示しない言語文化」へと逆戻りしていく懸念もある。

冨永(2013)が、「本当に強い国家をお望みなら、まず気遣うべきは巷の活力ではないか。もの言えば唇寒しの世では民は萎え、国は衰える。『和』のパワーどころではない」という主張に全面的に賛同したい。

11. おわりに

野田氏の問題提起を受ける形で「省略する言語文化」が顕著な日本文化の中にあって「見える化」など「明示する言語文化」の例を挙げ、日本の「現在地」の有様と特徴を検討した。残念ながら紙幅の都合上、三上章の「主題」「略題」などの研究や沼田善子らの「とりたて」の研究に触れる余裕がなかった。世界の言語文化研究の向かう「目的地」はどうなっているのかに関する「見える化」の意味を含めて、今後の課題として取り組んでいきたい。

(注 1)『2013 年日本言語学会の第 147 回大会予稿集』より

(注 2) マブソン青眼(本名、Mabesoone Laurent　1968 年フランス生まれ)は、パリ大学大学院日本文学研究科博士課程修了し、早稲田大学大学院教育学研究科で博士課程を修了し、博士号（学術)を取得している。専門は小林一茶研究、俳文学、比較文学で、脱原発アピール・黄色いリボンの提案者の一人でもある。

10 歳の時、ボードレールの「旅への誘い」を読み、詩人になることを決心した。16 歳の時、交換留学中に栃木県立宇都宮高等学校の図書館で松尾芭蕉句の英訳と出会い、志を「詩人」から「俳人」に改めた。のちにパリ大学で日本文学を学び、25 歳の頃から句作がフランス語から日本語に変わった。その後再来日し、1996 年から長野市に住み、信州の俳人・小林一茶の研究と執筆活動に専念している。俳句結社「海程」（金子兜太主宰）の同人である。句集に『空青すぎて』（第 3 回雪梁舎俳句大賞受賞）『天女節』『アラビア夜話』『渡り鳥日記』、『フクシマ以降 APRES FUKUSHIMA 』(Editions Golias、2012)、研究書に『詩としての俳諧、俳諧としての詩 - 一茶・クローデル・国際ハイク』（永田書房、2004 年）、エッセーに『一茶とワイン - ふらんす流俳諧の楽しみ』（角川書店、2006 年）、『江戸のエコロジスト一茶』（角川書店、2010 年）などがある。(wikipedia「マブソン青眼」参照)

(注 3) 日本教育カウンセラー協会(2014)『教育カウンセラー標準テキスト(中級編)』(図書文化)参照

(注 4)「パブリック・ディプロマシー」という概念は、2013 年 11 月 17 日の「社会システム＜芸術＞－全体像の解明に向けて」という公開コロキウムにおいて立命館大学の竹中悠美氏によっ

て示された。竹中氏は「アート資源なき小国の写真コレクションに覗く外交戦略―ルクセンブルグの『ファミリー・オブ・マン』と『苦渋の時代』―」と題する発表の中で、「パブリック・ディプロマシーとは、政府要人間で行なわれる通常の『外交』に対して、文化を通じて他国の民衆に直接働きかける『文化外交』のことで、元外交官エドムンド・ガリオンが提唱した」と紹介した。また同氏は、アメリカのパブリック・ディプロマシーとしての＜The Family of Man＞に対して、NATO 加盟国であるルクセンブルグのディフェンス・ディプロマシーとしての＜ファミリー・オブ・マン＞という考え方もできるとした。

（注 5）ディフェンス・ディプロマシー（防衛外交）とは、「軍隊及び国防当局が有するその他のアセット（文民含む）の、平時における、信頼醸成等の戦略的関与、対話、民主的な軍民関係を広めるための活動、各種能力構築支援等の総称」（鶴岡道人「NIDS コメンタリー　防衛外交の時代」防衛研究所、第 35 号、2013 年 10 月 15 日）のこと。

【参考資料】

NHK『ラジオ深夜便』(2011 年 2 月号)
NHK『ラジオ深夜便』(2011 年 5 月号)
ウィキペディア・フリー百科事典（本文中には、「wikipedia」と略記）
「クールジャパン」ja.wikipedia.org/wiki/クールジャパン（2013 年 12 月 16 日検索）
「マブソン青眼」ja.wikipedia.org/wiki/マブソン青眼（2013 年 12 月 16 日検索）
「俳句」ja.wikipedia.org/wiki/俳句（2013 年 12 月 16 日検索）
「見える化」ja.wikipedia.org/wiki/見える化（2013 年 12 月 16 日検索）
「ウィキリークス」ja.wikipedia.org/wiki/ウィキリークス（2013 年 12 月 16 日検索）

【参考文献】

河合隼雄（1995)『働きざかりの心理学』新潮文庫
杉本良夫・ロス・マオア(1982)『日本人論に関する 12 章』学陽書房
冨永格(2013)「日曜に想う・国家優先、『和』のパワー損なう」『朝日新聞』12 月 15 日付け記事
林伸一(2007)「場の倫理と個の倫理～日本事情論としての考察～」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第 57 号 pp. 1－15
林伸一(2008) 「『和』の文化と『差』の文化―日本事情論としての考察―」日本比較文化学会発行『比較文化研究』No.82、pp.81－92
林伸一(2014) 「『省略する文化』と『明示する文化』―日本事情論としての考察―」山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第 64 号
ヒューマンアカデミー(2009)『日本語教育教科書 日本語教育能力検定試験 完全攻略ガイド』翔泳社
ホール，Ｅ．Ｔ．(Edward T.Hall)著、岩田慶治・谷泰訳（1979)『文化を超えて』ＴＢＳブリタニカ
李暁娜(2010)「『切れる』と『キレる』に関するマインドマップ調査について」山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第 33 号、pp.69-84
渡辺靖(2011)『文化と外交―パブリック・ディプロマシーの時代』中央公論新書